COM TALK

原 幹恵

高校を卒業してすぐに東京に行くことが決まっていたので、まわりの友だちは高校三年生のときに免許を取り出したんですが、私は取らなかったんですね。東京で生活するんだったら、車はそんなに必要ないかなって思って。

でも最近になって〝車を運転できたらなぁ〟って思うことがよくあります。たとえば海がすごく好きなので、1日お休みの日ができたら、好きな音楽を聴きながらふらっと海に行けてきっと楽しいんだろうな、とか。あと、たまに地元に帰ったときに、以前は運転なんてまったくできてなかった友だちが、車をスイスイ運転していろんなところに連れていってくれたりすると、〝みんな大人になっちゃった。私だけ置いていかれてる…〟って気分になりますね(笑)。

普段、車に乗るのは、やっぱり仕事中の移動のときが多いです。天気の良い日だと、外が寒くても車の中は日差しでぽかぽかと暖かくて、すごく幸せを感じます。特に忙しいときには、車に乗ることで気持ちの切り替えができるので、とても大切な時間です。

海外に行ったときも、車で移動するのがホントに楽しくて。気分が盛り上がるような音楽をかけながら海沿いの道を走ったりすると、すごくテンションが上がるんですよね。ただ、移動の車中で休まなきゃいけないのに、風景を見るのに夢中になりしすぎて、現場に着いた途端、眠くなっちゃうなんて失敗もよくあります(笑)。

もし免許を取ったら、ですか?か⁉ すご~い。私もいつかそんなおうちに住んでみたいな(笑)。そのためにも、はやく免許を取れるようにがんばらなきゃですね。

最近、女性の間でパワースポットがすごく流行ってるじゃないですか。私も大好きなので、車でいろんなパワースポットを巡ってみたいです。

(最新の機械式駐車場についての説明を受けて)今ってお部屋の中から車を出す操作ができるものもあるんです

Mikie HARA

■プロフィール
はら・みきえ　女優

1987年7月3日生まれ、新潟県出身。2003年の「第9回全日本国民的美少女コンテスト」にてグラビア章を受賞し、芸能界デビュー。以降、雑誌のグラビアやテレビのバラエティ番組を中心に活躍する一方、2007年からはドラマや舞台に活動の場を広げ、女優としても高い評価を獲得。今年の春には、初出演映画『苦い蜜～消えた「白衣のビートルズ」～』の公開が予定されている。

COM Vol.24　CONTENTS

New product	技術の粋をここに結集。業界待望のFLX:フレキシブルパーク誕生!	2
COM TALK	原 幹恵	4
Front Line 建築家インタビュー	石上 純也	5
Arrangement 納入事例	ホテル龍名館東京	10
Full turn フルターン事例	亀戸サンポーパーキング	12
Renewal リニューアル事例	昭和大学病院(入院棟)	13
	鹿児島中央ビルディング	14
Information COMプレゼント		16

機能の境界をあえて「ぼやかす」ことで他の目的にも開かれている建築をつくる

石上 純也 Jyunya ISHIGAMI

森をイメージした神奈川工科大学のKAIT工房で
2009年日本建築学会賞(作品)を受賞した石上純也氏の、
「建築をつくることは環境をつくることと同じ」という発想を聞いた。

楽しいものづくり空間を目指した 神奈川工科大学「ＫＡＩＴ工房」

もともと神奈川工科大学がＫＡＩＴ工房に求めていたのは、授業で使うのではなく、学生が趣味で何かを作ったり、サークルなどの団体が自主的に行う製作活動の支援ができるような施設にしたい、という要求でした。また、学生だけに限らず、地域の子供たちが工作教室や陶芸教室を開いたりできるような、大学という学校の中にあっても、ものづくりを通して、パブリックな場所を作りたいということでした。

神奈川工科大学KAIT工房

こうした施設は、日本の大学にももう一カ所あるらしいのですが、それは、既存の施設などを改造して使っているものがほとんどで、最初から空間として、建築全体がパブリックな、ものづくりの場所として作られた施設はないらしく、建築自体もそういうものにしたいという話をいただいたわけです。

私は、その話を受けまして、自由に学生がものづくりできるとともに、創作活動の支援と言いますか、何か、ものを楽しく作れる意欲が持てるような空間ができればと思いました。林間学校のように、森の中で自分の空間を探しながら、何かを作れるようなイメージです。

神奈川工科大学KAIT工房

いろいろな機能の要求やプランニングもありましたが、自然の森の中のように、ある場所は広々と、ある場所はこぢんまりと使えたりと、ある程度、空間の仕切りが保たれていながらも、開かれている空間です。ワンルームで何でもできるというのではなく、自然のように開かれているけれども、同時に、閉じてもいるという、両義性をその空間に持たせるわけです。

そして、建築そのもので空間を細かく細分化していくと同時に、開くことができればと思い、構造体として建築を成り立たせている重要な要素である「柱」で、空間を柔らかく分けることができないかと考えました。森のように、ある程度、規律をもった空間を作るために、柱という構造体で空間を区切っていくわけです。壁で空間をしっかりと区切って部屋をつくっていくようなやり方は、一人で自分が使う本棚を作りに来る人もいたり、場合によっては、地域の子供たちが２００人ぐらいやって来て、同じ木工作業をするという、空間に占める人数の幅が ありますから、もともと大学側の要求に合っていないと思っていました。

普通、こうした場合は多い人数に合わせるわけですが、そうすると日常的には一人で来る場合が多いですから、体育館の中で一人で居るような、取り留めのない空間になってしまう。そこで目指したのは、一人で来たときにも、ある程度、親密な空間にもなるし、大勢の人数で来たときも、ある程度、開かれて開放的になれるような空間にしたいなと思いました。そういうわけで、仕切っているような、仕切っていないような、境界線がぼやけていくような、曖昧な空間にしてみようと思ったわけです。

建築をつくるとは環境をつくることと同じで 広い範囲で考えないと要求を満たせない

僕は建築をつくるときに、空間をつくることや、機能だけにとらわれたくないと考えています。建築は、それ自体で閉じているのではなく、僕らを取り込む大きな環境の一部だと思っています。この部屋も自分の環境の一部ですし、部屋の窓の外側に広がっている町並みや山並みなども環境の一部だと。こういったものを、シームレスにとらえなければならない時代だと思っていまして、たとえば、ひとつの部屋のことだけを考えて建築をつくるのではなく、かなり広い範囲で考えないと、社会的にも機能的にも要求を満たせないのではないかと。僕は、建築をつくるとは、ある意味、環境をつくるようなものだと思っています。建築をつくることと環境をつくることは、都市をつくることと同様なものととらえたいと思っています。

四角いふうせん

ＫＡＩＴ工房の話でいえば、室内に森のような環境をつくる。それは、個々に空間をつくるというよりは、何か漠然とした広がりといいますか、包み込まれるような状態をつくる。そういう方向でやりたいと考えました。なぜそうするのかというと、たとえばクライアントに工房を要求されたからといって、単純に要求された部屋だけをつくっても、その機能だけなら使えますが、そのほかには使えないと言うのは、今の時代の建築としては成り立たないと思っています。その理由は、これだけいろんな物事が速いスピードで変化しているのですから、クライアントの要求も建築と一体の固定的なものかというと、そうではなく、その都度変わっていくかもしれません。しかし、建築は残ってしまいます。ですから、クライアントのプログラムだけを根拠として、建築を組み上げていいのかと。もちろん、クライアントの要求は満たすべきですが、同時に境界を「ぼやかす」といいますか、他の目的にも開かれている建築をつくりたいと思っています。ですからＫＡＩＴ工房も、工房であると同時に、それ以外の機能も入っていてもいいと思いました。実際に、具体的には、写真展を行ったり、飛行機を展示したりなど、展覧会等も開催しているらしいのですが、単純に作業をするだけの場所ではなく、それ以外の使い方もできる場所にしたいと思いました。今、求められているのは、そういう建築だと思っています。

table

table

建築が一つの理由だけで成り立っていると その幅が非常に狭くなってしまう

「林」というのは、一本一本の木の位置は、科学的には解き明かせるかもしれません。しかし、そういったことよりも、自分たちの回りに、何かよくわからないけれども広がっているという状態が、自由度や深さを出している気がするのです。そう考えてみると、建築が一つの理由だけで成り立っていると、その幅は非常に狭くなってしまう。たとえば、見るからに廊下のような場所をつくって、廊下以外には使えないとなると、クライアントの要求が、時が経って成立しなくなった時に、使えなくなることもあり得ると思います。

それに対して、KAIT工房では、森のような空間の質が確かにそこにあって、それぞれ理由があって、木(柱)が配置されていますが、その原理が見えないというか、そういうものがつくりたかったわけです。もちろん、「機能」を満たすことは重要な目的ですが、僕が考えているのは、開かれた「機能」といいますか、クライアントの1の要求に対して1で応えるのではなく、10個応えられるようなものをつくりたいと思っています。全体としては、機能的には、柔らかく要求を満たしつつ、ある程度のフレキシビリティがあるので、そのつど使い方を変えられる、建築というものを目指しています。

森と別荘のある家

それぞれの人間が感じる雰囲気や広がりを 重要視することがこれからの建築の課題

環境とは何かと考えると、ある人が感じる環境、そして別の人が感じる環境と、無限に並列して存在する世界なのだと思いますが、それが成り立つような場所をつくりたいと思っています。空間とは客観的に感じるものですが、それぞれの人の多元性のある建築のつくり方ができないかと。それぞれの人間が感じる雰囲気といいますか、広がりを大事にしたいと考えています。もちろん機能を満たしていることは大事なことですが、僕は建築の最も根本的な部分として、人間がその場所をどうとらえるか、どう感じるかということが最も重要だと思っています。オフィスをつくったとしても、ある快適性がなければ建築としては成り立たないのではないかと。誰かがその場所を使ったときに、初めて感じるようなひろがりや快適さなどが最も大事で、機能はそれに付随するものだと思っています。機能が大元にあって、そこから建築を立ち上げるのではなく、そこにいる人がどう感じるかが、根本的な部分だと思っています。これからも、そのような建築の世界を広げていきたいと考えています。

row house

row house
左上 勝手口とにわ
右上 本棚とにわ
左下 ダイニングとにわ
右下 洗濯物とにわ

大きなボリュームを ポジティブな方向に変換する工夫を

立体駐車場などは、なかなか目に触れる機会が少ない施設だと思うのですが、僕が思うには、もう少し表立って出てきてもいいのではないかと思います。言うなれば倉庫のようなものなのですが、大きなボリュームがもつ、建築的な影響力をもう少しポジティブにとらえたほうがいいのではと。コスト面など、いろいろな理由から、単純に組み上げるだけになってしまうのかもしれませんが、何らかのアイデアで、立体駐車場が出来たあとのほうが良かった、というような可能性があってもいいと思います。実際に、地上に建って現われてくるものですから、求められている要求というのは、単純にクルマを積み上げて収納するだけではないと思います。そのボリュームとして、大きさがもつ影響力を、実際の建築の設計と同じレベルで作ると新しい可能性が出てくるのではと。あの特有の威圧感を、ポジティブな方向に変換する、活用の方法がどこかにあるのではと思っています。

P R O F I L E

石上純也 Jyunya ISHIGAMI

1974年生まれ。建築家。2000年東京藝術大学大学院美術研究科建築科修士課程修了。2000―2004年妹島和世建築設計事務所勤務。2004年石上純也建築設計事務所設立。

2008年ヴェネツィア・ビエンナーレ建築展にて日本館で個展。2009年日本建築学会賞作品賞(神奈川工科大学KAIT工房)を受賞。2005年キリンアートプロジェクトで「table」、2007年東京都現代美術館「Space for Your Future」展で「四角いふうせん」を出品。著書に『ちいさな図版のまとまりから建築について考えたこと』INAX出版がある。